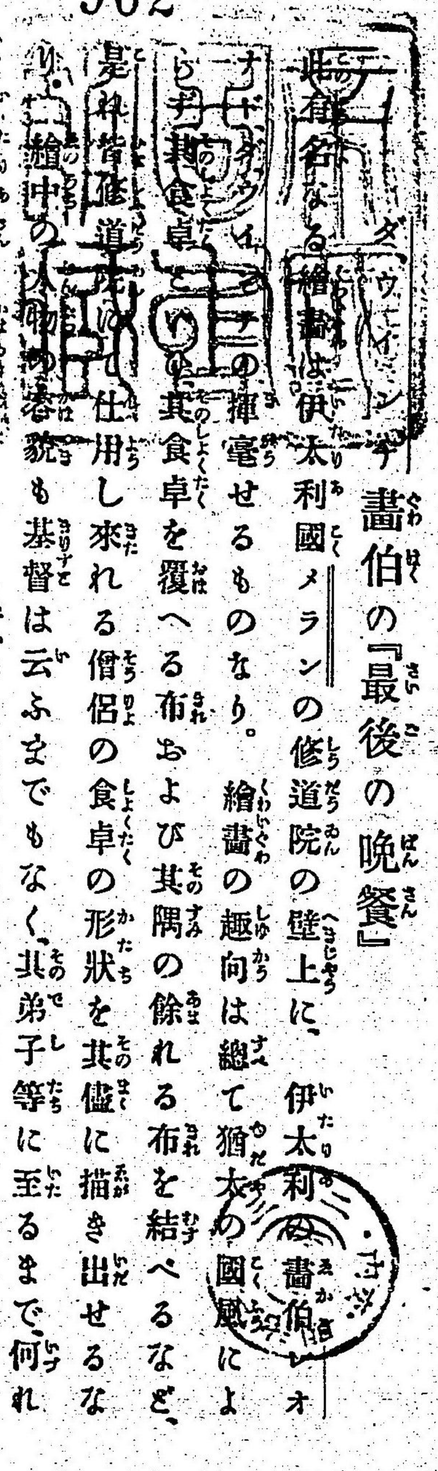
D-78-1
316
276

主の晩餐

横濱山手二百六十二番
常磐社發行

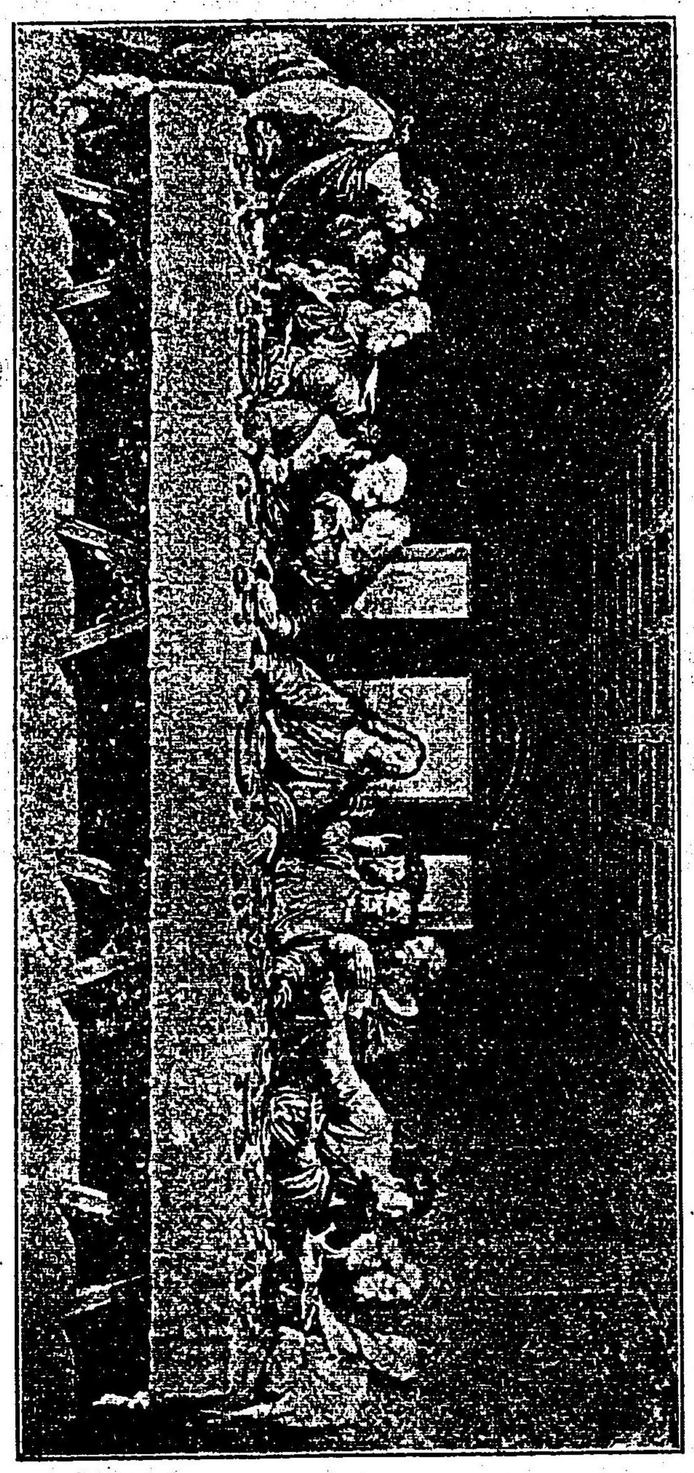
特47
962



ダヴィンチ畫伯の『最後の晩餐』

此有名なる繪畫は伊太利國メランの修道院の壁上に、伊太利畫伯レオナルド、ダヴィンチの揮毫せるものなり。繪畫の趣向は總て猶太の國風によりて其食卓といひ其食卓を覆へる布および其隅の餘れる布を結べるなど、是れ皆當時仕用し來れる僧侶の食卓の形狀を其儘に描き出せるなり。繪中の人物の容貌も基督は云ふまでもなく、其弟子等に至るまで、何れも伊太利人の面貌に據れり。畫伯は基督が其弟子に向ひて『汝等のうちの一人われに逆く者あり』とおほせて驚かし給ひし時の有樣を描げり。基督の頭の少しく傾ける樣や、其兩手の動ける樣や、其總ての態度は少しも反抗の摸樣なく、靜に天に任せ給ふの樣見えたり。其左右の兩側にある人物は、三人づゝ一團となりて坐せるものゝ如し。其うち最も人目を惹くものは、基督の右側にある一團にして、ヨハネ、ユダ及びペテロの三人なりとす。

ユダは駭き振り向きながら、其右の手に財嚢を堅く握れり。ペテロは我身を寄せ掛けつゝヨハネに迫りて、其反謀人の誰なるかを問はしめんとし、誤つてユダに觸れ、彼の前なる鹽皿を轉覆せり。或る國にては、鹽を共に食するを以て、友垣を結ぶの誓となせるが如く、鹽をこぼすを以て爭論のしるしとなせり。基督の左側なる中央の人物は、年長のヤコブなり。トマスは右の人さし指を擧げ、ピリポは熱心に『主よ我ならず』と云へるものゝ如し。基督の右側なる末端の一團は、互に打駭きて語り合へり。弟子中の年長なるサイモンは、嚴然として卓の末端を占めたり。ダッタイは宛も其云ふ所に力を入るゝかの如く、右の手を擧げたり。マタイは其兩手を基督の方に擴げ、卓の反對の末端にはバルトロマイの耳を傾けて聞つゝあり。年若きヤコブは其左の手をペテロの肩にのせて、何か説明を促しつゝあるものゝ如し。アンデレは大に驚きて高く其兩手を擧げたり。



『餐晩の後最』の伯爵チントイウッダ

主の晩餐

第一章　主の晩餐の由來

イエス弟子に曰けるは我苦難を受る先に爾曹と共に此過越を食するを大に願へり

（路加廿二〇十五）

主の晩餐は父母なき子女にあらず。此が先祖は白髮の尊敬すべき老人なりき。むかし世界のうちにて、唯ユダヤの國民のみ、獨りの眞神の存在を知りし時に當り、此國に大なる饑饉ありたり。國民は難をエヂプトの國に避けて、其地に移住することゝなれり。然るに最初は親切なる待遇を受け、地面をも與へられて、幸福のうちに生活なしたれども、年月の經過すると共に、其人口も漸く繁殖しければ、エヂプト人は之を壓制し、苦

役を與へて奴隷となしたり。此に於てユダヤ人は自由を欲し、頻りにエヂプトの國王に願ひて、其故國に立歸らんをを乞へり。左れども此請願は斷乎として許可せられざるのみならず、却て斯る請願をなせしがために、更らに一層の苦役を加へらるゝをとなれり。此時ユダヤの國民にして、若しも平素武器を用ゐ慣れたる兵士にてありしならんには、或は干戈に訴へても自由のために戰鬪べかりしに、彼等は數多の婦女子ある牧蓄の民に過ぎざりしが故に、不平ながらもエヂプトの國王と其兵士とには抵抗すると能はざりき。左れば其苦痛の時には、唯だ天を仰で神の祐助を祈るの外なかりき。此時神は如何にして彼等を救ひ給ひし乎、聖書の歷史に據るに、或る夜ユダヤの牧羊者は、各其群羊のうちの最良き小羊を撰拔みて、之を殺し、其血液をとりて、之を門の鴟居に塗り置けり。此夜死の天の使はエヂプトの國中を通過りて、上は國王の宮殿より、下

は貧民の小屋に至るまで、此羊の血を門に塗り置かざる、エヂプト人の家族の長子は盡く死ぬるをゝなれり。此に於て國中の哀悼一方ならず、ユダヤ人を深く恐怖れければ、彼等に夥多の贈物を與へて、速に其國內を立去らんをを乞へり。爾來ユダヤの國民は年々幾百年となく引續きて此當日の夜、小羊を殺し、其肉を食ひて急ぎエヂプト國外に立去りし故事を記念せんがために逾越の節會を執行することゝはなれり。蓋し逾越しとは天の使がユダヤの國民の門に羊の血の塗りあるを見て、此所をば逾越して他のエヂプト人の家に至りしより然か名づけしなり。

偖て今は當にユダヤの國民のみならず、全世界の國民が罪惡ある奴隷の束縛を免れ可き時機到來れり。而して其殺さるゝ所の小羊とは、純潔して缺點なき神の子イエス、キリストなりとす。而して其殺されし時日は、宛も此逾越節に當れる日にてありき。イエスは其弟子等と逾越節の晩餐

を食しをはり、躬ら殺されんために出で行き給ひたり。斯の如くして古來の國民的なる禮典の上に、更に新にして永久に世界的なる禮典を建設し給へり。最早人民の救濟のために、小羊を殺すをなきかはりに、キリストの肉と血を表示す所のパンと葡萄酒なる極めて單純の物質を用ふることとなれり。又之を守るは、一年に一度なりしかはり、三箇月に一度なり、一箇月に一度なり、或は又一週間に一度なり、何時にても差支なきをにて、之を正式に執行する場所は、教會若くは人々の家なれども、信者の希願と必要によりては、病人の枕邊に於て執行するともあるなり。

第二章　記念のため

我を記ん爲に此を行

（路加二十二〇十九）

洗禮を受くるは一生涯に唯一度にして、再び之を繰返すことなし。左れども晩餐の禮式は、人の生涯のうちには十度びなり、百度びなり、千度びなり、幾度となく、之を繰返して守るなるべし、洗禮は基督教の堂に入るの門なり。人の一度其門内に入や、永く其仲間の信者と共に、キリストの榮光ある贖罪の御地走に與るを得べし。蓋し此晩餐はキリストの制定め給ひし唯一の禮式なるが故に、教會の他のすべての禮拜よりは、我等をして一層近くキリストに接せしむるものなり。キリスト曰く『我を記ん爲に此を行』と、左れば我等の晩餐式に與るは、我等の今尚ほ信仰を維持るを表はさんが爲めにあらず、教會の古來よりの習慣なるが故にも

あらず、これキリストを記念んがために外ならざるなり。左れば如何にして能くキリストを記念んとする乎、試に哥林多前書十一章の廿六より三十節までを閲讀するときには、我等が適當に此禮式に與らんためには、先づ銘々がおのれの心を省るを以て、第一の義務とするものゝ如し。むかしキリストの初めての晩餐式を弟子達に執行し給はんとするや、『汝等のうち一人われに逆く者あり』とおほせて、大に彼等の自反を催し給へり。此時反逆人なるイスカリオテのユダは、其無罪を粧はんが爲に、白白しくも他の弟子とともに『主よ我なる乎』と尋ねたり。キリストは明かに其の彼なるを告げ『汝が爲んとする事は速かに爲せ』と仰せて放ちやり給へり。ユダは主と其食事を共にし、他の弟子等と同じく、飲食はなしたるものの、其心の罪のあまりに深きが故に眞に晩餐を受くること能はざりき。基督信者に於けるも亦然かなり。何人にても教會の晩餐式に連なり、他

の會友と共にパンを食し、葡萄酒を飲みうるにもせよ、若し其心のうちに、罪惡を微かに隱し居る時には、キリストより何物をも得ること能はずと知るべし。是れ唯だ外形に禮式を守るのみにて、其心にはキリストと何の交通もなきと知るべし。左すれば我等が晩餐の禮式に與かるに當り、先づ第一に大切なるは、我等銘々己れの心の内を吟味して、潛める罪のありや無しやを確むるにあり。而して若し罪あるを見出す時には如何にす可き乎。我等は其罪をして、キリストと我との間の隔離とならしむ可き乎、否な、我等は寧ろ其罪を棄て、謙遜りて主の御前に跪き、如何に我が如き罪人を救はんがために十字架の上に死に給ひしかを思ひ、只管罪の赦しを願ひて、新たに此身を献げまつるべし。キリストは人の唯だバプテスマを受けしのみにては、罪より全く免るゝ能はざるを知り給ひしが故に、我等をして屢次主の我等が罪の爲めに、苦み給ひしを記

念せしめ、此記念によりて我等は常に罪を離れ、主に近き奉るの方法とはなし給へり。

我等晩餐に與るときには、心を其杯とパンとに寄せずして、其杯とパンとの表はす主の流せる貴き血と、其裂き給へる軀とを思ふべし、又パンと葡萄酒とを配與る教師のことや、同席の會友のことなどを心に留ず、唯だ如何にキリストの御前に出づべきやを心とす可し、是れ眞の交通なり―キリストを記念し、其心のうちにてキリストと交通る、是れ眞の交通なれ。

第三章　豫想

今よりのち新しきものを神の國にて飲ん日まで　（馬可十四〇二十五）

主の晩餐は啻に過去のことを記念するのみにあらず、將來にも關係して、豫め我等の心に待ち望む所あるの禮式なり。云はゞ晩餐の禮式は過去と將來の兩方を指示す標札の如し。記念會は大抵悲しきものなり、若し此晩餐の式が我等の罪と主の死とを記念するに止まるならば、甚だ悲しき禮式なるべし、左れどキリストが杯を取り謝して之を弟子に與へ給ひし如く、我等も亦キリストが罪と死とを制服し給ひし、其捷利を祝す可きなり。キリストは罪なき生活をなし、死より蘇生り給へり。我等キリストを信ずる者も亦遂には罪と死とに打勝ちて、永遠く天國に於て罪なき歡喜のうちに、主と共に生活ることを得べし。獨逸の語にテフェルヘー

ヒグと云へることあるが帝王の食卓に坐する價値と云ふ義なり。主の晩餐に與るは取も直さず、王の饗宴に招かれたるなり。既にバプテスマを領けて信者となり、而してりの信者となりしものが斯く爲すべきの義務として、形式的に之を爲すにあらず、眞心を以て眞實キリストと交通するものは、王の前に出でゝ其饗宴に與たるものなり。既に其心のうちには天の歡喜來れり、其罪は赦され、其悲しみは慰められ、宛も彼の葡萄樹の枝としては、其幹を見ること能はざる如く、キリストを見ること能はざるにもせよ、彼等はキリストと結びつけられしを知り、りの心のうちにキリストより沃ぎ込るゝ、能力と智惠と愛とを感ずることを得るなり。彼等は斯る晩餐の席に於て、更らに新なる能力を得て起立し、大なる歡喜をもて、神のために其與へられたる、銘々の職分を盡さんとて立ち去るなり。

主の晩餐は神の誓約なり。天の日の來る約束なり。『新しきものを神の國に飲ん日』は必らず來るべし。恐らくは我と晩餐に同席せし者のうち、回次の晩餐式の前に此日の來る者ある可し。恐らくは我等にも此日の來ることあるべし。我等は慥かに其時日を知ること能はざれども、主の晩餐に與る毎に、其日の一層近き來れるを知れり。又晩餐に與る毎に一層罪より離れて、一層密にキリストと結び付くを願へれり。斯くて我等はキリストの御約束に從ひ、其日の來るときには、天國に於て、主の晩餐に與るの準備を爲す可し。何となればキリストの御招ぎは彼の晩餐式の時に教師が―誰れにてもバプテスマを領けし者は來れよとにはあらずして、凡てキリストと其靈に於て交通ることを知りえしものは來れよとなればなり。

主の晩餐をはり

明治三十四年二月廿一日印刷
同　年同月廿三日發行

編輯人　横濱市山手町二百六十二番　ボーカス
發行人　横濱市山手町二百六十二番　デキンソン
印刷人　横濱市太田町六丁目九十四番地　菅間德次郎
印刷所　横濱市太田町六丁目九十四番地　横濱分社
發行所　横濱市山手町二百六十二番　常磐社

常磐といふ婦人雜誌は、旅行記や、育兒法や、和洋料理や、裁縫や、衛生や、有益なる物語や、面白きおはなしや、其他婦人傳道者の心得となるべき事柄は更なり、信者の家庭や、婦人會や、日曜學校に於て用ふるやうなる、子供のよろこぶ讃美歌など、いづれも收めて、皆この雜誌のうちにあり。

日曜學校用の札の鎖や、二十六福カードや、褒美の札などは需用益〻多くして、版を重ぬること、既に數回に及べり。又信者の家庭を飾るに屈竟なる聖母や、基督の肖像や、聖誕や、其他尙ほ二三種の美麗なる繪畫あり。常磐出版ものを委しく知らんとせらるゝ方は、何時にても、御申越次第出版目錄を進呈し參すべし。

D78

The Lord's Supper.

Institution.

In Remembrance.

In Anticipation.

Tokiwasha, 262a Bluff, Yokohama, Japan.

主の晩餐

ボーカス

国立国会図書館

020736-000-9

特47-962

主の晩餐

ボーカス／編

M34

ABI-0556